矢田丘陵椚峠のアオモジ群落の分布について

近畿植物同好会会誌第 31 号、2008 所収

加茂町（現木津川市）のアオモジ

近畿植物同好会会報 No.104、2008 所収

川端一弘

近畿植物同好会々誌第31号，2008

矢田丘陵椚峠（くぬぎ）のアオモジ群落の分布について

川　端　一　弘

はじめに

アオモジ Litsea citriodora (Sieb. et Zucc.) Hatusima は本来九州西部に分布する。すなわち九州東部には見られず九州西廻り型分布し（注1），山口県，琉球列島に産する落葉亜高木である（栽培品の逸出は岡山県，滋賀県，大阪府，京都府，愛知県，伊豆半島，三重県，兵庫県など近年生育可能地域に拡がっている）。雌雄異株であり，その生育地は林縁や伐採等で開放された陽光地である。

奈良県のアオモジは平群町の生駒山系の集落（久安寺もしくは鳴川）で栽培されていたものが逸出し野生化したものであるという（森本1989，瀬戸1992）。大阪市立自然史博物館には1965年に平群村（現平群町）鳴川で栽培されていた標本がある（瀬戸1992）。その後，二上山東麓に生育することが報告された（瀬戸1992）。次いで矢田丘陵松尾山頂北部で報告されている（森本1996）。私自身も1997年頃に松尾山頂よりさらに北である小笹の辻付近（大和郡山市矢田山町）のスギ林内，矢田丘陵遊歩道脇で樹高1mほどの稚樹を見ている（その後矢田丘陵の整備で伐られている）。最近では榁木峠や近畿大学裏山でも見ている。いずれも小さな幼木でアオモジの分布域が拡大しているらしいという認識であった。

また，飛火野でも2mほどの若い木を見た（川端2004）。そのおりに瀬戸剛氏からはアオモジはすでに春日山原始林へも侵入しているという話

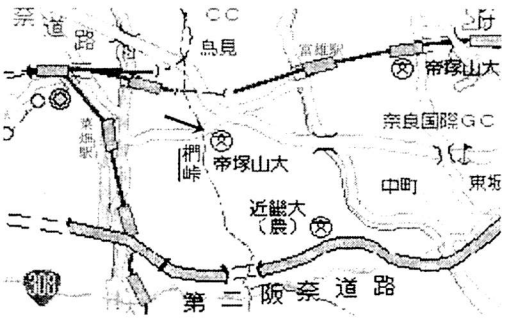

図1　椚峠拡大図（エキサイト地図より引用）

をうかがった。

このように奈良県で分布域を拡大しているアオモジであるが，矢田丘陵で確認していたものはいずれも幼木であった。一昨年秋（2005）に椚峠（図1）の矢田丘陵散策路で胸高幹周24cm，樹高6.5mほどの雌木（実をつけていた）を生駒市公園緑地課の巽眞一氏より教えていただいた。生育地は椚峠散策路登り口を入ってすぐの所で10mほど東には帝塚山大学の正門がある場所である。付近は斜面を削った造成地であり，巽氏からは大学が植えた可能性があると説明をうけたため，植栽したものと受け取っていた。

2007年2月には生駒山系の宝山寺近辺，生駒市軽井沢町で蕾をつけた成木を見た。そこでこの機会に花の写真を撮ろうと再び椚峠へ出かけた。

現地に到着すると散策路（尾根筋に付けられている）からこの小尾根の反対側西側斜面にさらに花を付けている木を確認した。またその場

所からは沢を隔てたスギ林を通して複数のアオモジが見られた。そこであらためて道路にもどり，県道大阪枚岡奈良線から斜面を観察すると広範囲に生育しているのが確認できた。この場所のアオモジは植栽されたものではないことが判明し，椚峠のアオモジ分布調査を行うことにした。

アオモジの逸出について

分布調査を報告する前にアオモジの逸出について貴重な報告があるので最初に引用し紹介しておきたい。

報告は佐藤孝敏（1985）「伊豆半島に於けるアオモジのルーツ判明」である。

「（前略）生育地（注，南伊豆町）を訪ずれ近くの農家を何軒も尋ね歩く中で，春のお彼岸の頃，この付近一帯では山裾から中腹が（アオモジの花で）黄色く色づくということ，またそのような現象は昔からみられたものではなく戦後のことであるということ，さらに年々その分布域が拡がっていること等を聞き出すことができた。そしてとある農家の軒先で，この地方特産の桜葉作りをしている老夫婦からその息子さんがかつてこの木を導入したものであることをつきとめた。早速，今は下田市に住んでいるというその息子さん（大野重雄氏）から聞き取り調査を行った。その結果大野氏は，昭和27～28年頃切花用として大手種苗会社の型録販売により，苗高60～70cm余りのアオモジの苗木５本を購入し裏山へ植えた。４～５年してから切花として東京市場へ出荷したが，数年で枝不足となり以後は放置した。現在，５本の原木は枯れてしまってない。以上のことを聞きとることができた。」

とあり，出荷（花を付ける程成長）が昭和32年頃からと思われる。奈良県での最初の標本が昭和40年のものであることから奈良県のルーツもこのカタログ販売にある可能性がある。

なお，佐藤氏は発芽試験を行っておられ，発芽率が90％近い値であることを報告され，しかも初期成長が極めて早いことを示されている。

現地の地理・生育環境

アオモジの生育地は県道大阪枚岡奈良線の椚峠南斜面である（図２）。北斜面にも若干の生育が確認できるが奈良市水道施設，生駒市ゴミ処理施設の公共施設建設が行われ，現在病院の建設が進んでいる。

椚峠は奈良市の三碓と生駒市の菜畑を結ぶ古道の峠で，大和郡山から生駒宝山寺への参詣道

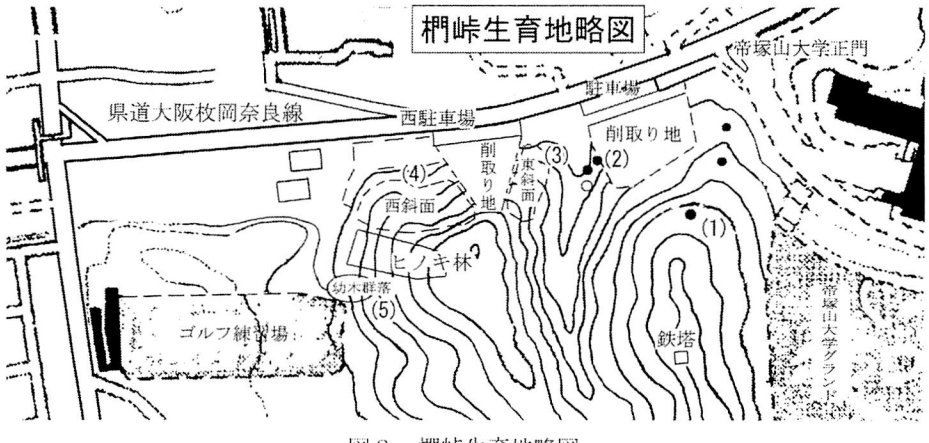

図２　椚峠生育地略図

としても使用されていたという。東側には1958年12月25日に開通した阪奈道路富雄インターがあり，この頃に自動車道として道路拡張，直線化が行われたらしい。詳細は分からないが斜面の切り取り掘削に伴う伐採があったようである。

さらにその後付近の宅地開発に伴い道路に面した斜面には施設や帝塚山大学，商業施設などが建設されている。これらの施設建設に伴い南側には駐車場の設置が行われて，さらなる斜面の掘削が行われたようである。駐車場は二箇所あり，その間には小さな谷津地がある。谷津地にある水田跡にはスギの植林が行われている。これらの開発時期については不明である。

東側駐車場の裸地化した斜面には松が植林され，西側駐車場の斜面は急斜面で下部の一部にサクラが数本植えられているが，その他は自然放置されている。現在は一面のクズに覆われナガバモミジイチゴ，クサイチゴ，ヒメコウゾ，アカメガシワ，若干のヤマザクラなどが侵入している。こちらの駐車場は若干掘削時期が早いようである。駐車場から数メートルのところに高さ１ｍほどの１本のアオモジが侵入している（根元で一度伐られている）。さらに数本の幼木も見られる。

掘削面の周囲は二次林であり，一部がスギ植林地である。コナラ，ソヨゴ，リョウブ，ヒサカキ，ネズミモチ，ネジキ，サカキ，ミヤマガマズミ，イヌツゲ，アラカシ，ウワミズザクラ，ヤマザクラ，アセビ，マルバアオダモ，カナメモチ，アカメガシワ，タカノツメ，シャシャンボ，ヒイラギ，カマツカ，ツクバネウツギ，アオキ，ミヤコイバラ，サルトリイバラ，スイカズラ，ウスノキなどが見られる。

分布調査・胸高幹周調査

分布調査は2007年，個体確認が容易な花時の４月上旬に行った。アオモジは早春の開花と同時に新芽の展開が見られる。まだほとんどの落葉樹の新芽の展開がないため，花が咲かない幼木も同時に観察できるからである。

確認できた木は胸高幹周を計測し，樹高を目測したが，ほとんどが６ｍから7.5ｍであった。一部斜面に張り出したものは10ｍ近くあったが垂直高は低かった。そのため樹高は省略して報告する。

計測したアオモジの最大幹周は75cm（この木は１ｍで二又となり，さらに二つに分岐しているため地上高60cmで計測）である。樹高は約７ｍほどで大きく枝をひろげた樹冠直径は樹高と同程度であった。アオモジは陽光地では樹高よりも樹冠を拡げるタイプの木であるようだ。

生育地の範囲は図２で示し，(1)散策路，(2)同尾根西側，(3)大規模な切削切り通し東側，(4)西側に分けて胸高直径を報告する。

株立状のものは複数本が合体した可能性があるが，樹数は１本とし，そのうちの最大径を計測した。単位はcmであり省略する。

(1) 散策路脇，椚峠口から南へ順に示す。

24，34，15，９，

・送電線鉄塔周囲のもの７，９（地上50cmで一度伐採），11（１ｍで一度伐採），幼木10本

(2) 同尾根西側

19，32，１ｍ程の幼木11本，50cm未満幼木約十数本（図２，白丸で示す）

(3) 切り通し東側，下部から尾根へ順に示す

46，75（１ｍ，1.5ｍで分岐し三又，高さ60cmで計測），45，24，24，33（20cmで二又），43，25，27，23（２株立），36，19，33，36，16，24，21，27，25，22（２株立），26（２株立），20，22，28，18，15（２株立），11，19，

13，16，29，32，31，35，21，14，計36本。林床には幼木は全く見られない。

(4) 切り通し西側，順不同であるが概ね東より西へ

56，5.5，53.5，36，42（２株立），30，50，36，34，25，33，30，31（50cmで二又），55（１ｍで二又），52，44，26，55，44，45，51（30cmで二又），49，52（20cmで二又），58，55.5，30（５株立），56.5，5，60，43，30（２株立），64，29（20cmで二又），43（30で二又），27（30cmで二又），32（３株立），30（２株立），38，34（４株立），29（３株立），32，27，27，43，28（３株立），19（４株立），20.5，18（２株立），22（２株立），44（２株立），39，33，計52本。林床には幼木は全く見られない。

(5) ヒノキ植林内には一年生から数年生の幼木が多数あり，隣接する伐採跡地には一度伐られた跡がある１ｍほどの幼木が多数密生（目測で100本を超える）している。

樹齢の推定

この生育地の起源を調べるために年輪を計測した。サンプルとしたアオモジは(4)切り通し西側，胸高幹周58cmのものである。地上高60cmで年輪を数えた。結果，年輪は15年と意外に若かった。年輪が数えられない実生からの生育期間を考慮しても20年生未満の木と推定される。

計測したアオモジの幹からは年輪５年を越えると生長量が大きいことが分かった。10年で幹周約18cm，15年で幹周40cmほどに成長するようである。

この群落には胸高幹周60cmを越えるものが数本あるが生長量から推量すると最大でも樹齢25年ほどではないだろうか。

以上から推論するとこの群落の初期形成は30年前を越えることはないだろうと思われる。この二次林内には朽ちた切り株が見られ，大きなものは直径50cmほどのものが残っている。つまりアオモジは道路拡張工事により伐採された二次林跡地に生育したといえる。切り取られた斜面にはもともと生育していない。

生育地の考察

アオモジは果実を食べた鳥類により種子散布がなされることが知られている。そのために親木と離れた場所にも分布域を拡散させる。その距離は約２ｋｍほどで，例外を除き比較的短いとされる（中西1994）。

もし，椚峠のアオモジが久安寺・鳴川起源のものであるなら直線距離にして約8.5ｋｍ，約6.5ｋｍであり，かなり遠距離である（図３）。奈良市では富雄川下流において園芸用樹木栽培は近年に一部で見られるが（アオモジ栽培はない），はたして当時になされていたかは疑問である。椚峠付近では全くその形跡はない。生駒市側では現在も園芸栽培はなく過去にもなかったと思われる。

このように遠距離の逸出が考えられるなら，春日山原始林内のアオモジの来歴は知られていないが，椚峠からの逸出と考えることも可能である。

アオモジの幼木は(1)，(2)，(5)の箇所のみ確認している。群落内には幼木は確認できていない。(1)は送電線鉄塔下に，(2)はアオモジ成木から５，６ｍ離れた林縁地点である。(5)については後述する。

散策路並びに(2)のアオモジはいずれも小さく，その種子は遠くから運ばれたものでなく，すでに成長した西側斜面(3)(4)のものから拡がったものと推量される。

(3)(4)のアオモジは伐採後にいずれからか運ばれた種子により生育したものである。その起源

はおよそ30年前と推量される。鳴川，久安寺では40年前から種子の供給源であることから，両地のいずれからか運ばれたものらしい。鳥類による種子拡散が意外に遠距離であることも可能と思われる。

(5)はゴルフ練習場と二次林の間にある狭いヒノキ植林地と伐採跡地である。この伐採跡地にアオモジ幼木が密生しており，ヒノキ林内に幼樹がたくさん発芽している。すぐ前にある民家の方にお聞きすると数年前に持ち主が整理（伐採）されたという。

アオモジの種子は数十年発芽力を保つといい，この地は貯まった埋土種子が伐採により陽地となり一斉発芽したもののようである。佐賀県ではこのような密生群落があるという。伐採された木に雌株のアオモジがあり，落下種子が貯まっておればこのような密生群落の出現は可能であろう。すぐ横のヒノキ林内のものは日光が差し込み，アオモジの発芽に適する地温に達したものと推察される。

このように椚峠のアオモジはそれぞれの履歴を持った群落であり，その初源は椚峠自体にあるのでなく，長距離におよぶ種子の飛散もしくは鳴川，久安寺の中間点にアオモジの供給源があったものと推量される。

資料については元大阪市立自然史博物館の瀬戸剛氏にご教授紹介いただいた。紙面をお借りして深謝もうします。

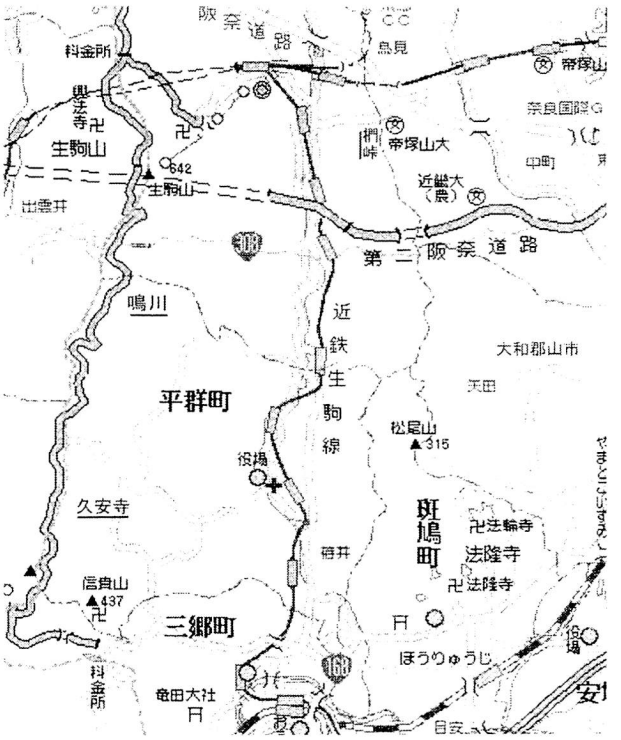

図３　椚峠全図（エキサイト地図より引用）

注１　初島住彦・新敏夫（1956）「九州西海岸ニ特殊な分布をする植物について」『植物分類・地理』46:98-100に「九州に於ける暖地性植物の分布状況を見ると東側のみにあって西側に全く見られないもの（植物名省略），甑島や薩摩の外は東側にのみあるもの（植物名省略），があるかと思えば西側のみにあって東側にないもの（ナタオレノキ，ダンチク，ツクシザクラ，アオモジ，ヤマヒハツ，ハマチンチョウ，カントラノオ，クロトチウ，マルバサツキ，タヌキアヤメ，ハママンネングサ等）が東側より多数知られており，東西両側にも分布するが寧ろ西側に多いもの（植物名省略）も知られている。此等南方分子の北上の様子を見ると琉球列島，奄美群島，トカラ列島を北上し，大隅半島や日向南部には見られないか又は極く稀にしかみられないで九州西岸を

北上する所謂“九州西廻りの分布型”を示すものが多数ある。(中略)

アオモジ　奄美大島より北上しトカラ列島に見られず種子島，屋久島に多く，大隅半島には殆どみられず薩摩半島，甑島列島，天草，長崎県平戸島に及んでいる。(後略)」とあり，現在は福岡県や佐賀県にも知られている。

参照文献

川端一弘．2004．飛火野（旧第二御料地）の樹木について(1)．奈良植物研究会会報84:11-14

森本範正．1989．アオモジ関西に帰化？．奈良植物研究会会報38:19

森本範正．1996．アオモジの矢田丘陵侵入状況．奈良植物研究会会報59:8-10

中西弘樹．1994．種子はひろがる・種子散布の生態学．平凡社126-147

佐藤孝敏．1985．伊豆半島に於けるアオモジのルーツ判明．レポート日本の植物24:31-32

瀬戸　剛．1992．二上山東麓のアオモジ群落．奈良植物研究会会報47:11-12

加茂町（現木津川市）のアオモジ

川　端　一　弘

今初夏に西澤公男氏（京都植物同好会会員）より加茂町のオオフジシダ生育地を案内いただいた。そのおりに加茂町にアオモジが生育することをお聞きした。その生育範囲は広範囲におよび、さらにその加茂町のアオモジの来歴も分かっているとのことであった。なるほど案内いただいた大門の道路脇には数本のアオモジが見られた。

川端（2008）は生駒市の椚峠に生育するアオモジを紹介した。そのなかで春日山原始林のアオモジについて「このように遠距離の逸出が考えられるなら、春日山原始林内のアオモジの来歴は知られていないが、椚峠からの逸出と考えられることも可能である」と指摘した。しかし、椚峠から春日山原始林の西端までを距離計測すると直線で約12km強の距離があり、加茂町大門からの距離約3kmに比較して遠距離であり椚峠からの鳥類による種子拡散は無理があるかと思われる。

そこで加茂町のアオモジの生育範囲を知るべく、再び西澤氏に案内をいただき、アオモジを導入したというO氏に連絡していただいた。

○当尾の里のアオモジ

浄瑠璃寺門前のO氏とは所用で直接お目にかかれなかったが、西澤氏が電話連絡をしてくださり、

水呑み地蔵とアオモジ

氏からは50年程前までは花卉栽培を行っており、アオモジは、当時名古屋の種苗会社よりカタログで５本取り寄せて栽培をしたという話を得た。名古屋の種苗会社については現在の種苗組合員の名簿には記載が無く、詳細は不明である。氏はその後すぐに花卉栽培を止め、茶屋を業としたという。アオモジは花卉収穫をすることなく放置されたそうである。この50年程前という年は、佐藤孝敏（1985）の伊豆のアオモジについて、栽培者が昭和27～28年頃のカタログ販売から購入されたという記事と一致する。加茂町のアオモジの来歴については導入者ご自身からの証言を得られ明らかになった。

生育範囲については加茂町植物調査隊の方が詳細なメモをくださり、以下そのメモを紹介しつつ述べてみたい。生育地は当尾と呼ばれる地域で約30体の野仏と浄瑠璃寺、岩船寺がある里である。最初に見た大門のアオモジは現存するアオモジ中最大の大きさだそうである。株立ちのように見えるが３本がほぼ同じ所から生育しており、そのうち１本は枯死している。幹周を計ってみると高さ約1.2mのところで94cmあり、椚峠のものから推量すると40年ほどの樹齢であろうかと思われた。枝先までは約15mあり道路を覆い尽くしている。この木からは、アオモジの寿命はそう長くはなく、50年程であろうかと独り推察した。大門仏谷の磨崖仏附近には数本が見られた。

浄瑠璃寺前の塔尾茶屋駐車場の周囲には数本が見られた。参道のＯ氏宅の庭には２本植えられており、留守であるが見てほしいと言伝があった。参道の脇より石仏の見学コースへ入り、水呑み地蔵へと向かう。この水呑み地蔵のある谷で最初にアオモジが栽培されたそうである。クズやススキで覆われ荒廃した谷であるが、中腹にはアオモジが林縁を飾るように点々と見られた。帰宅して地図で確認するとこの尾根筋の南側は奈良市東鳴川町や中ノ川である。奈良市境のすぐ北でアオモジが栽培されていたのである。

水呑み地蔵から尾根筋のコースへもどり小さな谷へ出ると二三枚の谷田へかぶさるようにアオモジが数本見られた。道は山に入り、数メートル高の峠を越えると「道の左手に『アオモジの林』と看板があり、森林守り隊の人達が手入れをした林があります」とメモをいただいた地点になる。

手入れをしたという林はアオモジの一斉林であった。同じ太さで直径約３cmのアオモジが100本はあろうかという林であった。モヤシのように細く林立する様は見事である。木々を伐採したあとに陽地となった所の埋土種子が一斉に発芽したものである。今後この林はどのように推移してゆくのであろうか。学術的な調査が望まれる。附近にもアオモジが点在している。立て掛けた看板には「アオモジ林　三月中頃前後開花」とあった。開花期には見事な様子を呈するであろう。

林を抜けるとまた小さな谷へ出て、山側にはアオモジが点々と生育していた。浄瑠璃寺から一鍬地蔵、阿弥陀地蔵磨崖仏・唐臼（カラス）の壺までがアオモジがたくさん拡散している地域であった。この道はスギ林などを抜けるためあまり利用されないが、散策コースでもあった。さらに岩船寺近くのわらい仏附近にも数本が見られた。

○奈良市側のアオモジ

最初に栽培をしたという水呑み地蔵の谷は奈良市境界（県境でもある）から100mも離れていないのではという距離である。当尾の里に広く拡散しているのなら奈良市側にも拡散しているはずであると思い、後日奈良県側を調べてみた。中ノ川から東鳴川町の山沿いを歩いてみるとアオモジはすぐに見つかった。山沿いには点々と繁殖しており、東鳴川町ではすでに大きくなった純林が２個

所で見つかった（写真はその一つで、他の個所より若年である）。親木からの一斉萌芽林であろう。親木はおそらくかなり以前に拡散していたものと推量できる。道沿いの一番大きな木を計測すると胸高幹周40cmである。山の中のものではさらに大きなものがあるかも知れない。まだ発芽して数年というものもたくさんあり、これらはこちらで育った木が親木であるようだ。放棄田の縁には高さ３ｍほどになったものも見られた。この地域では本数は数えていないが幼木をあわせて数百本はあると見られる。県道にもどると道路の縁にも数本が見られた。この県道はいままで何度も車で通り過ぎていたがまったく気が付かなかった。

○春日山原始林への種子供給地

このように奈良市側の一部を観察しただけであるが、アオモジが広範囲に生育していることが判明した。春日山原始林への距離はさらに数百メートルは近くなり、鶯滝までは直線で約２km、飛火野までは約３kmの距離である。種子の供給源は加茂町から奈良市の生育地からであると推定、いや断定してもよいと思われる。自然は人間が設定した行政境界とは何等関係がないことを痛感した次第である。

今回の調査では、西澤公男氏に取材とともに現地を案内いただきお世話になりました。紙面を借りて深謝申します。

〔参照文献〕

川端一弘．2008．矢田丘陵椚峠のアオモジ群落の分布について．近畿植物同好会会誌31：1-6
佐藤孝敏．1985．伊豆半島に於けるアオモジのルーツ判明．レポート日本の植物24：31-32

東鳴川町のアオモジ純林